

全波・短波受信機の解禁に就いて

通信院電波局 石川武三郎

昨年【1945年】9月18日、終戦に伴う通信関係措置の一として、逸早く全波・短波受信機（所謂オールウェーブ受信機）の解禁が実施され、洋楽愛好家その他一般世人からも歓迎されたのであるが、以下これに関し従来の経緯その他を簡単に記述して御参考に供したいと思う。

短波が実用化されるに至ったのは大正12、3年頃からであるが、諸種の特長があるために長足なる進歩を遂げ、昭和の初め頃には、英米を始め諸外国に於て、既に短波に依るラジオ放送をも実施するに至り、その後幾ばくもなく、無線通信は殆んど全部が短波帯又は中波と短波帯とを併用する様になった。従って受信機殊にラジオ受信機の如きも米英諸外国に於ては殆んど例外なく全波受信機を主用するに至り、我が国に於ても洋楽愛好家等の間には、これ等の外国放送を聴取する目的を以て、オールウェーブ受信機の施設を希望する向が漸次多きを加うるに至ったのである。

一方素人無線施設も、短波の発達に依る設備の簡単化に伴って急速に普及し、小電力の設備を以てよく遠距離通信を行い、国際間にも各国アマチュアの無線通信が盛んに交換されるに至った。これについて、我が国では昭和3年の帝国議会議に於て、不法短波無線施設による過激思想の媒介助成が問題となって、これが徹底的取締を政府に対し要望された程であった。面して実際に於ても我が国に於ける不法短波無線施設の状況は、当時既に斯る問題を惹起される情勢下にあったのである。勿論、無線科学の神秘開拓の熱意に燃える善良真摯なるアマチュア諸君もあつたのではあるが、その反面には、又この種簡便なる文明の利器を駆って思想運動に利用し、又は利用せんと企図し居る向も相当にあつたのである。斯くて我が国に於ける不法短波無線施設及び適法施設に依る不法通信に対する取締は峻烈を極むるに至り、これに伴い全短波受信機施設に就ても嚴重なる制限が加えられるに至ったのである。更に昭和12年日支事變の発生を見、次いで昭和16年今次戦争の開始されるに及んでは、防諜上の見地より、一層徹底的な取締が要請されるに至り、我が国に於ける全短波受信機の施設は殆んど全面的に禁止されることとなつたのである。即ち全短波受信機の許可される範囲は、駐日外交官に対し、その本国に於ける我が駐割外交官憲に対する相互主義に依り許可されるものの外は、僅かに情報局、外務省の如き外国情報関係官庁の施設するものに限られ、その他のものに就ては、軍関係のものは別として、官民を問わず一切禁止されていた許りでなく、これが取締も特に嚴重に励行され、殊に憲兵隊に依る違反者の摘発は峻厳を極め、違反者はその受信機を没収された上仮借なき処断を受ける状況であつた。

当時世界各国は殆んど例外なく無線放送に依る対外宣伝に狂奔し、特に交戦各国に於ては、思想戦・謀略戦に凡ゆる術策を用い、秘術を尽して敵国民心の攪乱乃至は厭戦思想の醸成に腐心し得た際であるから、各国は自国の対外及び対敵放送の充実強化を図る反面、自国民に対しては敵側放送の聴取を制限又は禁止し、就中独逸の如きは、この禁を犯す者に対し、死刑を課したとまで云われている。

しかしながら、短波に依り国内放送を実施している諸国は、より重要な自国民に対する国内放送を停止しない限りその取締の徹底を期し得られないのは当然であつて、国内放送聴取の目的を以てつけた同一受信機でこれ等外国よりの宣伝放送が自然に聴けるのであるから、各国がその取締に手を焼いたのも無理からぬ事であつた。この点については、幸か不幸か、我が国に於ては国内短波放送は実施せず（尤も南洋群島のみは已むを得ず例外として短波放送に依つて居た）、且全短波受信機の許可に就いては、終始一貫前述の如き方針を堅持して変らなかつたのであるから、この種外国放送に依る被害防止は比較的容易だつた訳である。これが為に全短波受信機に対してとられた我が国の方策は世界に類例をみないものであつて、これが我が国短波無線の発達を阻害した点は蔽えない事実である。敗戦と共に情勢は一変し軍国主義を一蹴した新日本は真の平和国家、文化国家として新発足する事となつた。文化日本建設の為に世界の声を聞き、世界文化を吸収するの用具として、全短波受信機の果すべき使命の大なる事は謂う迄もない。

当局は終戦に伴い実施されるべき幾多の無線関係諸施策の中、最も緊急なる事項として逸早くこれを取上げ、昨年【1945年】9月18日の閣議決定を経て全短波受信機施設の全面的解禁を発表し、且これが急速なる普及発達の促進を図ることとなつた。久しきに亘り世界の政治から、文化から強く耳を塞がれて居た我が国民は、今こそ全波受信機の施設に依り直接に世界の声を音楽を聞き、生のままの世界文化に触れることが出来るのである。そのことは建設途上にある文化日本のために如何に大なる好影響を齎すことが期して待つべきものあるを疑わない。

PDF 化にあたって

本 PDF は、

『無線と実験』1946年2月号

を元に作成したものである。

PDF 化にあたって、仮名遣いは新仮名遣いに変更した。漢字の一部には振り仮名をつけた。

脚注は原記事にはないが、読者の便宜のために今回新たにつけた。

ラジオ関係の古典的な書籍及び雑誌のいくつかを

ラジオ温故知新(<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/index.html>)

に、

ラジオの回路図を

ラジオ回路図博物館 (<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/radio/radio-circuit.html>)

に収録してある。参考にしてほしい。